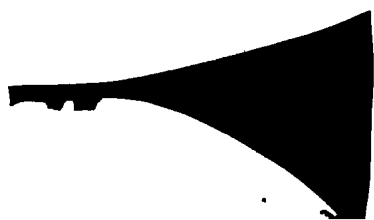


王国の芸人たち 小中陽太

王国の芸人たち

小中陽太郎





王国の芸人たち

昭和四十七年十月十二日第一刷

著者 小中陽太郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話東京 (〇三) 九四五―一一一 (大代表) 振替東京 三九三〇

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 有限会社光和製本

定価 五五〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©小中陽太郎 一九七二年

目次

第一章

馬場町の黒い城……………七

発端、風に散る木の葉……………一三

第二章

闇市の落日……………一八

こちらヒロシマ、街が——……………二七

第三章

白　い　岩……………三四

宿命の出会い……………三七

第四章

長島は要らぬ——御成婚中継の裏で……………四一

はした金に目がくらみ……………四六

第五章

大石武男の解雇……………五三

戦前からの闘士……………五七

徳川夢声とは何者ぞ……………六〇

労働芸人……………六九

第六章

協会職員のエリート意識……………七九

ゼンゴタイツパン……………八四

死 臭……………八九

第七章

屈辱の技能審査……………九八

出演料の仕組み……………一〇七

熱い夏——東京……………一〇九

広島の分離……………一一四

第八章

第二組合・全国運営会……………一二〇

誰がブルータスだ……………一二七

合唱団潰し……………一三五

第九章

粧 の 頃……………一四二

美しきものの魔……………一四七

第十章

カウンター・アタック……………一五二

個人として入るのでなければ……………一五八

木寺のめざめの発端……………一六五

第十一章

協会の内幕——麴町の隠し屋敷……………一六七

基幹放送と俗耳。木寺の休職……………一七四

第十二章

東京オリンピックの年の明暗……………一八八

紅白男女歌合戦の裏側で……………一九二

第十三章

語るも畏れ多い聴取料……………二〇四

広島 の 空……………二〇七

二つのキノコ雲……………二一〇

挽歌自演 芸術之使徒……………二一五

下請集金人への協会の弾圧……………二二一

第十四章

協会の本質は魚だ	二三八
このすさまじい賃金を見よ	二三四

第十五章

日芸労問題ついに国会へ	二四一
出演料は恩恵だ。田代の追求	二四九

第十六章

地労委で協会を追いつめる	二五七
兄組合、全日放労のエゴ	二六七

映画俳優は労働者か	二七七
マスコミの反動化	二八三

第十七章

協会会長は陳謝せよ	二八七
-----------------	-----

第十八章

一九七一年五月	二九七
歳月のうねりの中に	三一一
ふたたびサボテン公園	三二一

王国の芸人たち

装
幀
司
修

第一章

馬場町の黒い城

一

東京オリンピックの次の年にあたる一九六五年（昭和四十年）秋――。

十七時十分着のひかり十七号が淀川の東の終着駅にすべりこんだ時、そこから前方はレールも途切れて、橋桁ばかりが未練がましく女の腕のように西に向かって突出している川の上の空間は、すでに薄風色の夕暮の中に沈みはじめていた。空を行く地下鉄が淡い光の列を残しながら、左に大きく傾斜して高い陸橋を渡って行く。西方、夜の方から秋のはじめの風が吹きつけていた。木寺勇次はレインコートの襟をたてると足早にコースへ降りた。

改札口を出たところで、タクシーを拾おうかと、しばらく逡巡したのち、その夜のうちの広島行夜行の切符を見ておこうと考えて、結局地下鉄で梅田に出ることにした。切

符売場を求めて梅田駅前の黄昏の雑踏に入りこむと木寺はやっと大阪に到着した気持がした。小型タクシー乗場の長い列、中央郵便局の前の陸橋のシルエットの人ごみ、郊外電車のビクニックの広告、あやめ池で菊人形の展覧会がある、生駒山のケープルカーが夜間運転をしている……。結局特急券はなかった。木寺は小型タクシーの長い列のうしろについた。

木寺の番が来て、詰襟姿の運転手に、「馬場町の放送局」と告げながら、木寺は自分の胸がふだんより早く打ちはじめたように思った。それが放送局の名前を口にする時、木寺をおそうある昂奮のためなのか、桂木正にあうからなのか、彼にはよくわからなかった。古い型のコロナが大阪の夕暮れの騒音の中に、すばやく、身をくぐりこませた。

馬場町の放送会館は、大阪城の大手門脇の、夜にはすっかり人通りの途絶えてしまう裁判所やグラウンドや体育館のある官庁地帯の西南角に、煤まみれの墓石のような正面を見せていた。

「日芸労の事務所はどこですか」

かつては木寺の勤務先であった組織の中央局の一つで彼は遠慮がちに案内を請うた。

「日芸労？ 知りませんなあ」

と若い守衛が関西弁で言った。

木寺は地元の大阪の局でさえ、日芸労がそれほど知られていないのかと落胆しながら繰り返した。すると、

「楽団さんたちのことやがな」

と奥の方にいた年とった男が言った。

「そうか、Tスタの二階の部屋やったな」

若い方も思い出した。

「第一スタジオの横を出て、外梯子を上ってください。わかりますか」

「行けると思います」

木寺はそういって、ロビー正面に入口を見えている第一スタジオの前を通って、わきの扉を押した。裏手に別棟のテレビスタジオがあるのは知っている。その外壁にグレイに塗った階段が二つあった。どちらが目ざす部屋に通ずるものかわからずに、木寺がとまどっていると、うしろの扉があいて、先程の年老いた守衛が顔を出した。

「わかりまっか」

「それが……」

「ついていらっしやい」

守衛は片足をひきずるようにして、右手の鉄梯子を中二階へ向けてのぼった。木寺はこの男が急に親切になったのはなぜだろう。受付の椅子に坐ると心理的に日芸労の名をスムーズに出せないような圧迫感でもあるのだろうか、と思いつながりながら彼のとに続いた。

「ここですわ」

老人は中から明りが洩れている白いドアの前であごをしゃくると、不ぞろいな足音をたてながら戻っていった。スタジオの屋根にあたる張出し部分に、プレハブのパネ

ルで小部屋が組み立てられていた。全体が白ペンキで塗られてたつてある。

木寺はドアを軽くノックした。返事はなかった。彼は扉を押した。中は十畳ほどの広さで、中央に大きな木机が据えられ、周囲にロッカーが配置されている。机の上に読みさしの新聞がはうり投げであつた。右手に別のドアがあつて、その奥にもう一部屋あるらしい。木寺はそちらに移動した。まだ、室内に散らばつて立っている譜面台が、先ほどまで何人かが音合わせをしていたことを示している。室内の壁も白く塗られているので、螢光灯に照らされた部屋は、外科医の手術室のような感じだった。譜面台の林から離れて、小机によつて書きものをしている男に、木寺が気づいたのは、男が、ゆっくり椅子の上で振向いたからだつた。黒っぽい背広を着た男は、深夜の当直医といった印象を木寺に与えた。

「木寺さんですか」

「桂木……桂木正さんですね」

「そうです、桂木です」

固い表情のまま頷くと、立ち上つてパイプ椅子を引きずつて来て木寺の前に押した。その様子も患者に有無を言わず、開腹手術をしてしまおうという強引な外科医のような印象を与えた。木寺は、譜面台やチェロのケースを倒さぬように用心しながら、パイプ椅子に腰をおろした。

桂木正は、浅黒い肌に細い眼と薄い唇を備えた精悍そうな四十すぎの瘦せた男だった。その印象は木寺の知ってい

などの音楽家にもあてはまらなかった。学生運動の理論家肌の若者や、山登りをする男たちによくある顔だった。潔癖そうな細い眉の間のたて皺や、孤独を求め、人を寄せつけぬ硬い頬の線、意志の強そうな唇がその印象を強めている。

顔の輪郭は硬質ガラスの塊を激しくくだいた時の鋭い稜線だった。だが、その顔はまた粘り強い戦術や策謀をめぐらすのにあきない偏執狂的な陰険さも、ふっとゆがめる唇のはじや、細い鼻の線にただよわせた。そういう時、それはダフ屋やデン助トバクの香具師の中にいそうな顔になった。浅黒い瘦せた表情は、木寺に終戦直後にヤミ市をうろつきまわっていた特攻婦りの青年を思い起させた。

「今夜のご予定は？」

木寺はその夜の汽車で広島まで行き、帰途ふたたび大阪に立ち寄りたいと説明した。

「何時の汽車です」

「十一時五十分の準急はやとんです」

「そうですか、三時間ほどありますな」

と時計を見た。

木寺勇次がはじめて桂木正の名を耳にしたのは、木寺がまだ、放送局に在職していたころだったから、その聞くところは偏見に満ちた情報であった。それにしても、それまで、まるで屠所の羊のようにおとなしかった声優やバイオリン弾きが突然団結したことは、木寺たち新米ディレクターにとっても大きな驚きだったので、桂木という名前は木寺の耳の底に残った。いや、名前だけでなく、木寺は、桂

木と顔も会わせているはずである。木寺が名古屋の放送局にいたころ、桂木は委員長として、名古屋支部のオルグに度々やって来ていたからだ。それに木寺の方も、桂木がストライキを決行した昭和三十六年の暮、仕事で大阪を訪れて労働歌にかこまれたことがある。しかし、木寺には桂木の顔の記憶がない。当時の木寺には、芸能団員、つまり、バイオリン弾きや三枚目役者のストライキはまるでママゴトのように思えたし、かれらに加えられていた弾圧も木寺たちには殆んど知らされていなかった。木寺たちは、日頃顔なじみの劇団員や合唱団員たちが、木寺たちの制作部の部屋の前の廊下で、俄か仕込みの労働歌をうたい、珍妙なかっこうで赤旗を振っているのを薄笑いを浮かべながら遠くから見守っていたものである。しかしその昂揚も束の間のことで大半の組合員がおどされたり、すかされたりして懐柔されるとともにその問題はもうすんでしまったことだ、というように木寺たちは教えられた。木寺は（芸術家の組合などはやはり駄目なんだなあ）と少し失望して考え、それからこのことは忘れてしまったのである。

木寺にかれらのことを思い出させたのは偶然の機会だった。木寺が放送局をやめて一年たった去年の夏、木寺の友人たちが名古屋で現代音楽を中心とする小さなコンサートを開いた。木寺は仕事もなかったので、誘われるままに、それを聞きに出かけ、そのあとの反省会にも顔を出した。そこで木寺は名古屋放送管弦楽団員で、ヨーロッパ婦りのフルーティストの佐藤と隣り合わせて坐った。佐藤は木寺

が東京へ転じたすぐあと、スイスに留学したが、一年ほど前に帰国して、ふたたび、名古屋放送管弦楽団に籍を置いていたのである。木寺はその後の様子などを知らせ、佐藤は自分たちの労働組合の話をした。いかに協会の弾圧が卑劣であるか、その中で、いかにそれを跳ね返しているか……。

木寺は啞然としてこの大柄な青年の白い顔を見た。いつもフルートの細長いケースをもつて足早に局内の大理石の床を歩いて行く音楽家からは想像もできなかったような強さと誠実さを感じたからだ。

音楽会の昂奮のあとで、次から次へと抜かれるビールで少し陶然として来た木寺の頭に、四年前の春、廊下にひるがえった赤旗や労働歌がよみがえった。

この巨大な組織の中で、それと闘っている無力な一団が、今も敵として、存在している。

木寺は、まるで大きな牛のような感じのするこのフルーティストの朴訥な熱弁をききながら、奇妙な感動をおぼえていた。

「おい、木寺、今池へ繰り出そうや」

作曲家の中山がテーブルの向うから大声で呼びかけても、しばらく気づかぬぐらい木寺はこの男の言葉に聞き惚れていた……。

木寺のそんな小さな想念はすぐ断ちきられた。

「外に出ますかな」

桂木は外套をとると、先に立って、いま木寺が登って来た階段を降りたが、そのあとはロビイを抜けずに、そのま

ま街路に出た。流しのタクシーに乗りこんでから桂木ははじめ口を切った。

「局のまわりの旅館はどれも危いんです。女中がみんな金を握らされている。情報が流れるんです。芸能団の部屋にもマイクが仕かけられてました」

「そんなことまで」

と驚く木寺に、

「何をしやるかわからへん」
と桂木は吐き棄てるようにいった。

暗い寺町通りを抜けて、上六に出ると、近鉄ビルの前で車を棄てた。道路の反対側に魚をくわせる飲み屋があった。

桂木はのれんから顔だけ突っこんで、

「二階は？」

「あいにく、ふさがつとりますんや」

ふとった気のよさそうなおかみが答えた。それならここで我慢しようと、桂木が平土間の椅子に手をかけたとき、入れちがいに二人の男が入って来て、一人がおやという表情で桂木と木寺の顔を見くらべた。言葉は交したことはなかったが放送局の美術デザイナーだ。

それに気づいて桂木は外に出て、ふたたび車を拾った。

木寺は、そのあとで、桂木の話聞くまでは、いくら何でも少し神経質すぎると思った。しかしスパイの件を聞かぬまでも、考えてみれば放送局を免職になった男と、いま内部にあって放送局に対して最も激しい抵抗を続けている組合の委員長が二人で会談していることは、放送局側にとつ

て気になることであったろう。そのことで、妨害や干渉が加えられない、とは言いい切れないのが、この企業の執念深いところだった。

寺の多い通りを走り、長い築地塀の前を右に入った所で車を降りた。うらさびれた路地の中程で立ち止ると、桂木はあきれ顔の木寺に向かって、

「ここなら安全でしょう」

といった。旅館のおかみは桂木の顔を見るとすぐに、急な階段をのぼって、表通りに面した角の、狭い部屋に案内した。擦り切れた畳の中央に赤い卓袱台^{ちゃぶだい}が出てある。床の間には虎の絵が下げられ、片隅に小さな鏡台と衣紋かけがあった。

「ここでもよろしいか？」とおかみがふり向き、「お食事は何？」と立ったままきいた。

「ビールを四、五本、それにおつまみ」

と桂木がいった。

おかみは、間もなくセロファンに入った南京豆とビールをもって上ってくる、

「あとはお願いします」

といいおいて去ってしまった。

窓外の連れこみ宿のネオンが明滅すると、掛軸の虎が青くふさぎこんだり、赤くなって猛り狂ったりした。桂木が栓を抜いて、ビールを注いだ。

「乾杯しましょう」

グラスが干されると、「で？」と促すように桂木は木寺

を見た。木寺は、桂木たちの運動を最初から調べなおしてみたいこと、それも誰のため、というより、自分自身の生きるための仕事として調べたい、と言うことをなるべく大仰な言葉は避けて手短かに告げた。

桂木は、こまかく頷きながら、

「私たちも今までずいぶん新聞社にも働きかけて来ました。しかしただの一行でも記事になったことはあらしません。あの三十六年の大闘争の時にしても、地方版に一行だけですよ。同じマスコミ同士、というので、みんな差しとめられてしまいますねん。そこから、調査や発表となると圧力がかかるのは必至です。しかし発表できへんでもかまへん。私は聞いてもらいたい。こうやって来てくれた人は、あんたがはじめてや。ひとつ洗いざらいあんたに話しますわ。それに」とちよつと言ひ漱んでから一氣に「この話は、きつと木寺さんの闘いとも無縁やあらへんと思う」桂木は油で光った前髪が額に垂れて来るのを神経質にかき上げながら早口で喋った。木寺は氣押されたように、口ごもって答えた。

「ぼくは、自分が、まだ何を目安に生きてたらいいか、わからないのです。もっと話して下さい」

その夜、大阪の暖味宿の一室で、二人の男は、その物語を何かのためでなく、一人は鬱積する事実を吐き出すために溢れるままに語り、そして他方は、その中に生きる支えと勇氣を見つげるために貪るように耳を傾けた。そのと

き、四疊半で吐き出され、紡がれた白い、か細い糸は、その後何年にもわたって、抽き出され、紡ぎ直されて、やがて次第に大きな一枚の布にと織り上げられて行くのであった。

二

桂木正と木寺勇次は、その時から、七年半前の同じ日に、互にそれと知らず別々な場所、同じ放送局を相手に、自分の人生の曲り角を踏み出したのである。しかし、桂木の一步が、はつきりと放送局と対峙し、自分の人生を、自分の力で切り開いて行こう、とするものであったのに対して、木寺のは、何と他動的で、何と無邪気なものであったことか、そのことを、いま、大阪の宿で木寺は、痛いほど感じてしまふのだった。同じ日、とは、一九五八年（昭和三十三年）四月のことである。

この年の四月一日、木寺勇次は、青年らしい希望を抱いて、全日本放送協会に入社した。入社式に先だって木寺は、紺の背広を一着新調した。式の席上、新入社員を代表して、挨拶するためである。まったく子供っぽいことに、当時の彼は、そういうことを名譽と感ぜるような世界観の中に生きていたのだった。

前日まで、彼は、幼なさまるだしで、後輩の運動部の合宿に参加して沼津の寮にいらっていた。そして、三月三十一日の午後、もうこういう白い雲や青い波を友とすることはできなくなるのだ、という学生らしい思いこみで胸をふさ

ぎながら、東海道線に乗り、熱海をすぎると次第に暮れて来た海を見つつ、翌日のために答辭を暗誦した。

入社式は田村町の本館の第一スタジオで行なわれた。アウンサー、プロデューサー（当時は放送従事者をすべてプロデューサーと呼んだ）および事務部門、放送記者、技術者合わせて三百人ほどの人間が、学生のように行儀よく居ならんでいた。ただし三百人という数はひどく見劣りがした。何でも、それは五月の国会を控えて聴取料値上げのデモンストレーションだということだった。つまり、当時の聴取料はラジオ六十五円だったが、「これでは新入社員も採用できない」と国会に訴えるために採用を控えた、というのだ。果たせるかな五月、八十五円の値上げが認可されるや、企業は十月に一挙に三千人の人員を採用した。

このように入社式の日から、政治は木寺たちの上に大きな羽を伸ばしていたのだが、彼は当時、政治が自分たちに関係あるとは考えもしなかった。

会長の訓辭が終ると、木寺は新調の背広に身を固め、さながら運動選手の宣誓のようにぎこちなく、壇の上にすすんだ。当時の会長の野崎秀一は、小柄な男だった。長身の木寺が前に立つと、野崎の丸い頭が眼下に見え、木寺はそのことに、かえってあわてた。木寺の挨拶は「私たちはこれから全国に赴任して行くが、そこで電波の虹を花咲かせたい」というような美辭麗句であった。

木寺たちはそれから二十日間の講習を受けた。講習の内容は、徹底してエリート放送人たる心がまえを注ぎこむこ

とにあった。

四月二十六日、木寺は、一通の辞令とともに、名古屋中央放送局へ赴任した。馬鹿の一つ憶えのように、あの紺の背広を着て。

次に、木寺勇次が、この背広をまとして放送協会の公式の席に出たのはそれから六年後の秋、彼が免職を申し渡された時だった。長山春道芸能局長は「君とはじめて逢ったのは名古屋だったなあ。それにしても、君の趣旨から言えはこうなるのだが、全く一歩も引かなかったのはみごとというか……」

と腕を組んだ。三谷文芸部長が、廊下に出た木寺を呼びとめた。木寺がふり返ると老部長は、長い頭を傾けて、一寸、気の毒そうに笑った。それから手を差し出した。木寺は少し心を熱くして彼の握手を受け、そして田村町の建物を出た。以来、彼は、このビルに足を踏み入れていない。六年の間にいくらか大人になっていた木寺は、(この背広もいろいろな目を見たものだ)と自嘲とおかしみの混じった気持ちにとらわれたのだった。

さて、七年半前の四月二十六日という日、木寺勇次が名古屋中央放送局へ赴任したその同じ日、大阪では、桂木正の身の上に、思いがけないことが起ろうとしていたのだった。

その日、大阪放送管弦楽団のバイオリン弾き桂木正は、芸能団室の片隅で、生まれてはじめて、労働組合の規約なるものを起草していた。起草と言っても、放送企業側の社

員組合の規約を丸写しして、中の名称を入れかえるぐらいのものである。その間に、第一スタジオに集まった各地の代表が委員長を選んでいるはずであった。

だが、四月二十六日に、桂木の身の上に何が起ったかを語る前に、話は、それより、もう一年だけ前的大阪に遡らなければならない。

発端、風に散る木の葉

一

一九五七年(昭和三十三年)夏の終り――。

大阪放送管弦楽団の楽長増山^{マシモ}市木は、かねてから最年長のボスとして勢威を揮っていたが『歌の明星』のリハーサルの最中、突然怒り出し、コントラバスを倒したまま、第一スタジオの扉を荒々しく押しあけるや、正面階段を一足とびに駆け上り、三階の編成課の室内に躍りこむと、編成課長森山次郎に向かって、

「一体、わてらを何やと思つてるのか」

と激しい調子で毒づいた。事情はこうである。その日、『歌の明星』のテストのために午後全部をつぶして、楽団伝票の発注があった。ところが第一スタジオにオーケストラの連中が来てみると、かんじんの歌手も指揮者もディレクターも来ていないではないか。彼らは、あす本番の直前に、大阪にやってくるのだという。東京のスタッフは大阪

を一段下にみているから、地元だけで前の日にテストをさせておくことはよくあった。大阪の局からは若い見習いが一人ついているだけである。彼が楽譜を配り、大阪の楽団付き指揮者が練習指揮者になって歌手抜きでオーケストラだけ音を合わせた。「伊豆の踊子」や「ここに幸あり」などの単純な曲である。それで半日拘束されたので楽団員は不満だった。この企業では、ラジオ番組の場合、前日のリハーサルには、出演料の二割に相当するテスト料がつかない。つまり、出演料はリハーサル一回こみなのである。おまけに、リハーサル時間を長く取られると、その分だけ他の仕事が入らない勘定になる。そんな内情に加えて、簡単な歌謡曲のオーケストラ伴奏曲を四時間も繰返しリハーサルさせられて、楽団員はいらだてて来た。五時近くになって、若いアシスタント・ディレクターが、

「時間を計るのもう一度」

とストップウォッチを出したので、バスのトップを強く増山が立ち上って、

「時間いうたかて、歌い手がいないのに、何ぼ計ったかて意味ないやないか」

と口をとがらせると、それに対し若いアシスタントが、伝票が出ているのだから、黙って弾け、というようなことをいった。それで、増山は烈火のように怒って、三階の編成課にかけ上って来たのだ。

編成課長森山次郎は小肥りの三十代の男で、肥った赤ら顔の上に、年の割には少ない頭髪を綺麗に梳いている。彼

は汗を出して怒っている増山の言い分を面白そうに聞いてから、唇のはじを皮肉にゆがめて、

「増山さん、あなたは自分のクビが永久に続くように思っ

て、えらそうなことを言っているが来年は停年ですよ」

「何やて」増山の顔がゆがんだ。「そんなこと聞いたこともあらへん。大体、芸能家に停年なんておかしいやないか」

「聞いたことあらへん、といっても、そう決まったんです」

森山がちょっと笑ったようだった。

「いつ？」

「就業規則で決まったんですよ」

「就業規則？ そんなもの耳にしたこともないやないか」

「あなたが耳にしてもしなくても、規則で決まったんです」

「どう決まったんや」

すると、森山が冷たく言った。

「今後、あなたの方芸能団員は一年契約とすること、五十五歳の停年制をとること」

森山の眼に面白そうな色が動いた。

「増山さん、そうやって啖呵を切られるのも、あと一、二年やな」

「そんな無茶な……」

増山は思わず絶句した。安泰と信じていた自分の身分がたちまちがらりと崩れ落ちるような気がした。放送局の芸能員であるということは二十年もそこでコントラバスを